静岡発 こう読む

「家族」をめぐる作品から

▶▶▶加藤　裕治

先日、テレビ東京からシーズン2への期待が述べられていたように、アニメ「SPY×FAMILY」が話題である。

原作は二〇一九年に連載が開始された遠藤達哉氏による漫画。今年四月からアニメで放送された。スパイの男、殺し屋の女、エスパーの女の子、赤の他人の三人が、疑似家族として生活をはじめる物語だ。

三人はそれぞれの思惑を持ちながら、家族に参加している。互いが家族の成員としての役割を演じつつ、人々を欺くことを目的とする。そのため、彼らにとって家族の営みは、仕事のようなものである。だが仕事であるがゆえに、逆に三者が互いに協力し、家族の解体を回避し、「本物の家族」に見られるように全力を尽くす。その奮闘のドタバタが、コメディーとして秀逸だ。

アニメの物語として大変面白いのだが、私が気になったのは、このような家族の描き方が発するメッセージにある。そこで描かれているのは、家族とは決して「自然なもの」や「自明なもの」として存在しているのではない、ということである。もし家族というものを営むのであれば、それぞれの成員が、その営みを支えるように意識的に行動しなければならない。それは完全に仕事ではないが、しかし仕事にも類するものかもしれないという、家族の在り方に関する、極めて現代的な問いが含まれているのである。

さて家族の物語といえば、是枝裕和監督の最新作「ベイビー・ブローカー」もそれに当てはまるだろう。是枝監督は常に家族を問うてきた監督であるが、本作では事情があって子供を育てられなくなった母親を中心に物語が進む。映画で問われたのは、親が親の役割を果たせない時、子を誰が育てていくのかというものだ。「普通の家族」とは異なる、「新たな家族」の在り方を映画作品から模索している。

さて、こうした作品がなぜ話題になっているのか。それは「普通の家族」の在り方に固執すると、社会が行き詰まるという予感が人々にあるからではないか。

（静岡文化芸術大教授）

2022年7月24日
中日新聞（朝刊）p.5